

アウトウ栽培における摘芯が果実品質及び花芽形成に及ぼす影響

矢野和男・野口協一*・佐藤隆士**

(山形県立園芸試験場・*寒河江農業改良普及所・**山形県園芸特産課)

Effect of Summer Shoot Topping on the Fruit Quality
and Flower Bud Formation of Sweet Cherry

Kazuo YANO, Kyouichi NOGUCHI* and Takashi SATOH**

(Yamagata Prefectural Horticultural Experiment Station ・ *Sagae
Agricultural Extension Service Station ・ **Horticultural and Special
Productive Section of Yamagata Prefectural Government Office)

1 はじめに

山形県のアウトウは近年、加工需要の停滞や輸入自由化の進展等に伴い生食向出荷が加工向け出荷を大きく上回るようになった。

生食向け生産では高品質果実を生産する上で着色の良さが非常に大きなウェイトを占める。そのため樹冠内を明るくすることが必要である。樹冠内を明るくするためには冬期剪定で樹形を整え、夏期は徒長枝の除去等、新梢管理が必要である。近年、県内生産者は樹冠内の明るさを保つため、アウトウの着色が始まる頃から主枝等の太い枝から発生する徒長枝のみでなく、側枝部分の新梢も除去する「摘芯」を行うようになった。

しかし、「摘芯」については樹体や果実品質に及ぼす影響、実施時期など不明な点が多い。そのため今回は「摘芯」が果実品質や翌春の花芽形成に及ぼす影響、処理の適期について検討したので報告する。

2 試験方法

(1) 供試樹の条件

- 1) 場内圃場の樹勢中庸な「佐藤錦」16年生(アオバザクラ台木)
- 2) 樹高約4m 樹幅約7m
- 3) 雨よけテントを被覆

(2) 試験区と処理方法

摘芯時期；満開後25日(5月下旬)

満開後35日(6月上旬)

処理方法；摘芯は側枝の延長枝に対して競合するものや、側枝のバランスを乱すような強い新梢に行い、新梢の基部5cmを残して切り戻した(図1)。

試験区の構成；主枝単位に実施、1樹3区3反復。

(3) 調査項目と方法

1) 葉芽及び花芽

摘芯区の新梢先端の葉芽率及び花束状短果枝と1年生枝の花芽数、総小花数について処理翌年の4月に調査した。

2) 果実品質

1果重、着色程度(5段階)、屈折計示度、滴定酸度に

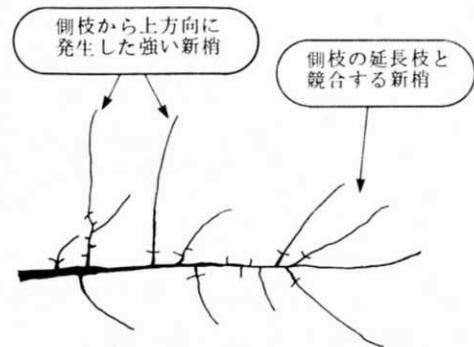


図1 摘芯の処理方法

ついて 処理当年の6月に調査した。

3 試験結果及び考察

新梢先端の葉芽率は、ややバラツキがあるものの、2か年とも満開後25日区の方が35日区より高い傾向を示した。

表1 摘芯処理と葉芽率

試験区	平均新梢長 (cm)				新梢先端の葉芽率 (%)	
	摘芯前		10月		1988	1989
	1988	1989	1988	1989		
満開25日後摘芯	14.2	11.6	11.5	13.8	100	92
満開35日後摘芯	23.0	21.5	5.9	8.6	70	87
無処理			23.3	38.1		

注. 満開日 1988年5月3日 1989年4月25日

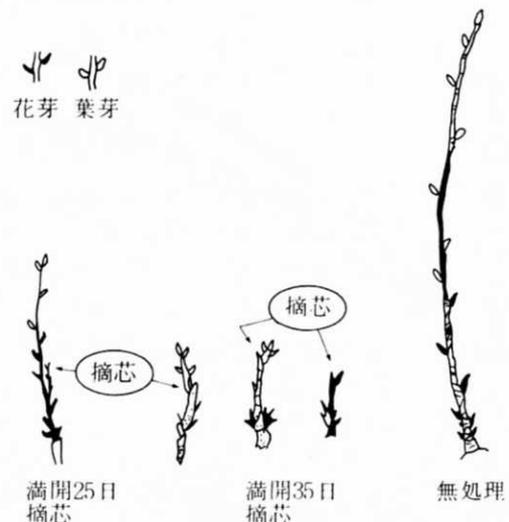


図2 摘芯後の枝の状態

このように満開後35日区で新梢先端の葉芽率が低いのは、摘芯後新梢が伸びず、葉芽が形成されないものが多くなったためと思われた(表1, 図2)。したがって摘芯の時期が遅くなるほど、葉芽が形成されずに花芽だけとなり、次年度開花結実後、枝が枯死する恐れが高まると考えられた。

花束状短果枝の花芽数、総小花数は1988年処理で処理間差がなかったが、1989年処理では大きな差ではないが満開後25日区で少ない傾向がみられた。

1年生枝の花芽数、総小花数は1988年処理では、満開後35日区は無処理区より明らかに少なかった。1989年では花

芽数、総小花数とも満開後25日区が最も多く満開後35日区と無処理区は差がなかった。このように満開後35日区で1年生枝の花芽数が少ないのは、摘芯後新梢の伸びが小さいために花芽の形成が少なくなるものと考えられた。(表2, 図2)

果実品質は処理による差がみられなかった(表3)。特に着色で摘芯処理区と無処理区で差がなかったのは、供試樹の樹形改善が進んで樹全体が明るかったことや、処理区が主枝単位であったため、摘芯処理区と無処理区で明るさに差が出なかったものと思われた。

表2 花束状短果枝及び1年生枝の花芽数、総小花数

試験区	花束状短果枝				1年生枝			
	花芽数		総小花数		花芽数		総小花数	
	1988	1989	1988	1989	1988	1989	1988	1989
満開25日後摘芯	6.3	6.3	16.7	17.0	8.9	12.3	23.1	29.9
満開35日後摘芯	6.4	7.3	16.5	18.5	7.5	9.2	18.4	20.6
無 処 理	6.6	7.1	16.4	19.5	10.0	8.9	25.8	20.6

表3 果実品質

試験区	1果重 (g)		屈折計示度 (BX)		滴定酸度 (%)		着色程度	
	1988	1989	1988	1989	1988	1989	1988	1989
満開25日後摘芯	7.5	8.4	19.8	20.6	0.76	0.75	3.4	3.5
満開35日後摘芯	7.6	8.6	18.9	19.8	0.72	0.69	3.2	3.6
無 処 理	7.7	8.5	19.4	20.6	0.76	0.72	3.3	3.5

注. 着色程度(果実表面積に対する着色割合)
1; 2割以下 2; 2~4割 3; 4~6割 4; 6~8割 5; 8割以上

4 ま と め

以上の結果からアウトウに対する摘芯処理は新梢先端の葉芽の形成程度や1年生枝の花芽の着生状況から判断して満開後25日前後が適当と考えられた。

なお摘芯にあたっては次の点に注意する必要があると考えられた。

(1) 摘芯は特に若木や成木でやや樹勢の強い樹に行うと効果的である。これらの樹では新梢の発生が旺盛であり冬期

剪定のみで樹体の明るさを保つのは困難である。しかし、摘芯を行うことにより樹体の明るさを保ち、樹勢を落ち着かせることが容易になる。

(2) 樹勢の弱い樹に摘芯を行うと益々樹勢の低下を助長するので実施しない。

(3) 着果数が極端に少ない場合、時として裂果を助長することがあるようなので、徒長枝の除去等、樹冠内の明るさを保つ程度にとどめる。